

日本色彩大年表

作成者： 岩崎純一
協力者・資料提供者： 青柳香織、小野薫枝、武田あさゑ、戸井留子、樋川夜涼、
道満幸江、藤山セン
第一期の最終更新年月日： 2011年6月17日
編集再開日 2019年5月20日
掲載ウェブサイト： <http://iwasakijunichi.net/>

天皇		元号		西暦								
						<p>茜は最も古い赤色染料。日本茜の四葉茜で、中国・朝鮮・日本の山野に自生。語源は赤根とされ、その根を染料として用いる。少し黄味の赤、つまり緋を染めた。</p>	<p>黒土の中に布を浸す原始的染色。</p>	<p>黄土、人類最古の天然顔料の一つ。水酸化鉄の含有量によって薄い黄から茶色までさまざまな色調。染色物にも使用。</p>	<p>顔料や塗料として用いる青土産出。</p>	<p>露草の花を白衣に摺り付ける原始的染色。藍の普及後には藍で染め出されるようになるが、鴨頭草(月草)という色名は残った。</p>	<p>紫根を使用。</p>	
						<p>朱、中国では南の方向を表す朱雀、夏の季節の朱夏を象徴する色。呪いの色、権威の象徴として、殷の時代から寺院・建物・絵画の彩色、印肉や漆器の色料として用いられた。朱は水銀の硫化物のこと。天然の原鉱は朱砂・真朱と呼んだ。中国辰州産のものが有名で、辰砂と呼ばれた。日本では、陶磁器で赤色釉薬あるいはその系統の色も辰砂と呼ぶが、別の物。天然朱は高価のため、一般には人造朱(銀朱)が使用された。良質のものを光明砂、普通のを丹砂と呼んだ。</p>				<p>6世紀以前、日本には青の顔料は存在せずとの定説。</p>		

					2c	◇『釋名』 劉熙					紺 「紺、含也、青 ニシテ赤色ヲ 含ム」									
					3c	◇『山海經』 (秦・前漢)					古代中国の宝 石、青碧の記 述。									
					280頃？	『魏志倭人伝』 陳寿	「真珠・青玉を 出す。その山 には丹あり」													
						◇『後漢書・西 域傳』 范曄					古代中国の宝 石、青碧の記 述。									
著作権者： 岩崎純一																				

天皇			元号	西暦								
					全般	赤から黄に至る色に、大いに燃える火を意味する「赤」を当てた。古来呪術的な意味の色。	琥珀、装飾・装身具・香料などに使用、「くはく」「あかだま」と呼んで珍重。地質時代の樹脂などが化石になったもの。	刈安染、堅牢性もあり、黄染の最も代表的な染料。	青土は「青丹」と書かれた。仏教伝来以後に大陸から岩緑青（孔雀石・マラカイト）伝わる。これも「あおに」と呼んでいたらしいが、青土と岩絵具の緑青とを呼び分けるようになった。枕言葉の「青丹」は、緑釉や緑青、丹朱で彩られた宮殿や寺院の緑色と朱色を意味する。	露草以後、青系はほとんど藍染。青でも緑でもない色には「碧」が当てられ、「あお」とも「みどり」とも呼んだ。	上古代、藍は青い染料の名前にとどまらず、染料一般の代名詞であり、紅も呉の染料という意味の「呉藍・くれない」である。	無彩色、鈍色・椽・薄墨などと呼ばれ、喪の色としての使用。

弘文 天武			664	冠位二十六階制	深緋(錦4・大小)			緑(乙6・大小)	紺(山5・大小)	深紫(織1・縫2・大小)、浅紫(紫3・大小)		黒(建武)
			665									
			666									
			667									
			668									
			669									
			670									
			671									
		白鳳		672		皂(くり)色、栗による染色か。栗の木は皮膚病に効くと言われ、天武天皇がこの色を着用か。						
				673								
				674								
				675								
				676								
				677								
				678								
				679								
				680								
				681								
				682								
				683								
				684								
			685	諸臣四十八階制	朱華(親王明1・諸王浄2)、「浄位より已上は、朱華を着る。」(日本書紀)			深緑(勤5)、浅緑(務6)		深紫(正3)、浅紫(直4)正位は深紫、直位は浅紫」(日本書紀)	深葡萄(追7)、浅葡萄(進8)	
	朱鳥				紅花、日本の文献上初出。							

持統				686		朱華、鉛丹の別名として服制に現れる。	白色、持統天皇により奴婢の色とされる。これにより、皮膚病予防には茜染の肌着を使用、白色の肌着が取って代わられる。							
				687										
				688										
				689										
				690	改定諸臣四十八階制	朱華(親王明1)、緋(直4)赤色と黄色の二つの色素を持つ紅花のみで染色か。			深緑(勤5)、浅緑(務6)	深縹(追7)、浅縹(進8)	黒紫(こきむらさき)・赤紫(うすむらさき)(諸王浄2)、赤紫(正3)			
				691										
				692										
				693										
				694										
				695										
文武				696										
				697										
				698										
				699										
				700										
			大宝	701	『大宝律令』諸臣三十階制	深緋・浅緋(直4)「直冠上四階深緋。下四階浅緋」(茜染による。)			深緑(勤5)、浅緑(務6)	深縹(追7)、浅縹(進8)	黒紫(親王明1)、黒紫・赤紫(諸王浄2)、黒紫・赤紫(正3)			

天皇	元号	西暦													
			全般	<p>橡、クリ・ナラ・クヌギ・カシなどの総称。鉄媒染した橡染を単に橡、灰汁媒染した橡染を黄橡と言った。染紙については、上代においても、黄橡も単に橡と呼び、黄褐色と赤褐色の木蘭のうち、前者を黄橡と呼んだ。柴(ふし)染は、栗・櫚・樫・樺などのタンニン物質を含んだ樹皮や柴木(しばき)を染料とした黒褐色や黒系の染色の総称。紫色は、黄色と橡色の間の色。</p>	<p>黄蘗、写経や戸籍簿に用いた紙黄蘗紙に使用。</p>	<p>緑、『万葉集』やのちの『延喜式』の中にも登場するが、上代はアオ、平安時代以降は木の芽や若葉の色の萌黄などを使用したため、あまり登場しない。</p>	<p>青碧、服色に使用されるが、中国からの玉石に由来か。青と碧はともに青緑系を指しているため、青緑色に用いたと思われる。ただし、僧尼の衣色として許されており、地味な青緑色か。</p>	<p>紫、日本では紫根の単一染の青味の強い紫。『延喜縫殿式』では深紫と浅紫の二級に分類。中紫の記載はないが、普通紫と言えれば中紫を指す。古代中国の紫は、赤色の下染に紫を上掛けした、朱に紛らわしい赤紫。</p>	<p>桃染、中国伝来の高価な紅花染であるとする。最下級の多人数の制服に用いられたことに合致せず。また、日本の文献上の紅花の初出は、『天智紀』以後。上代の桃染の染料は紅花以外、梅の木などか。</p>	<p>胡粉、白色顔料に用いる。鉛白も胡粉と呼んだ。胡の字は、海外渡来の材料であることを示す。</p>					
			【色彩歓喜の時代】	<p>臙脂、紅花による色素を正臙脂、インド・ビルマに成育するラクク・カイガラ虫による色素を生臙脂と言う。</p>	<p>比佐宜染・久木染。赤芽榭(あかめがしわ)、古名を久木・楸(ひさぎ)と言う。その葉で染め、灰汁媒染した黄</p>		<p>『万葉集』時代、水色系統は水縹(みはなだ)と言った。</p>	<p>葡萄染登場。果実の汁による摺染。</p>	<p>白土、法隆寺金堂の壁画の素地上塗され、白色顔料としても使用。</p>						

		神護景雲			767	<p>称徳天皇が諸王の子孫に六位を授け、その朝服の色を蘇比とする。それまで蘇比は、五位以上の人に着ることができるとされたり、無位の諸王が着るとされた。</p>													
					768														
					769														
光仁		宝亀			770	『万葉集』	<p>真朱(朱砂・辰砂) 「真金(まかね)吹く丹生(にふ)の真朱(まそほ)の色に出て言はなくのみそ吾(あ)が恋ふらくは」 (読人不知・巻14)</p>	<p>女郎花 「をみなへし秋萩交る蘆城の野今日を始めて万代に見む」 (読人不知・巻8) 女郎花は、万葉集で14首に登場。</p>	<p>鴨の羽色 「水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくも思ほゆるかも」 (笠女郎・巻8)</p>	<p>露草色 「つき草に衣はすらむ朝露にぬれてむ後はうつろひぬとも」 (読人不知・巻7)</p>	<p>杜若 「我のみやかく恋すらむ杜若にづらふ妹はいかがあるらむ」 (読人不知・巻10)</p>	<p>退紅 「くれなゐの薄染衣浅らかに相見し人に恋ふるころかも」 (読人不知・巻12)</p>	<p>白 「降る雪の之路(しろ)髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか」 (橘諸兄・17)</p>						
				同上			<p>丹色 「春されば花咲きををり秋づけば丹の穂にもみつ・・・」 (読人不知・巻13)</p>	<p>黄金 「すめろきの御代栄えむと東(あずま)なるみちのく山に黄金(くかね)花咲く」 (大伴家持・巻20)</p>	<p>鴨の羽色 「水鳥の鴨の羽色の青馬を今日見る人は限りなしといふ」 (大伴家持・巻20)</p>		<p>棟 「妹が見しあふちの花は散りぬべし我がなく涙いまだ干なくに」 (山上憶良・巻5)</p>	<p>桃染 「桃花褐(つきそめ)の浅らの衣浅らかに思ひて妹に逢はむものかも」 (読人不知・巻12)</p>							
				同上			<p>茜 「茜さす昼は物思ひぬば玉の夜はすがらに哭のみし泣かゆ」 (中臣宅守・巻15)</p>	<p>黄は、同じく幅広い色を指す赤の一部を指す。「もみぢ」の表記は「黄葉」がほとんど。</p>	<p>青丹 「あをによし奈良の都は咲く花のにはふがごとく今さかりなり」 (小野老・巻3)</p>		<p>紫 「紫の我が下紐の色に出でず恋ひかも瘦せむ逢ふよしを無み」 (読人不知・巻12)</p>	<p>紅・椽 「紅は移らふものぞ椽の馴れにし衣になほ若かめやも」 (大伴家持・巻18) (ここでの椽は、平安時代の黒椽)</p>							

天皇		元号	西暦									
				全般	赤、緋色を指し、赤色、赤白椽を指す。「赤色の袍」	落栗、襲色目の名に登場。	朽葉色隆盛。黄染に浅い紅花染を施した色。(赤・黄・青・濃・淡など)濃朽葉は赤朽葉、淡朽葉は黄朽葉か。	深緑・浅緑、位色であるが、和歌では深緑は常緑樹の青味の深い緑、浅緑は春の柔らかな若葉、特に柳の緑。緑の場合、「コキ」「ウス」ではなく「フカ」「アサ」が後世まで定着。薄緑は白味、浅緑は黄味が強い。	青、植物などの緑の濃い色を指し、青色、青白椽を指す。青白椽、天皇の褌(け)の袍の色として禁色とされたが、天皇の身の周りの世話をする蔵人等の着用は許された	紫、高位の象徴。濃色・薄色・半色・減色・縁色のみで紫の濃淡や色合を表す。薄色は聴色で、紅染の薄い色をも指す。縁色、紫根染の衣服は、他の衣服と重ねて置くと紫色素が昇華して移り染まることを、権者の影響力に染まることに喩えてそう言う。西洋の貝紫も権威の象徴で、ローマ帝国を経てビザンツ帝国の象徴色となる。	紅花一斤(600g)で絹一疋(二反)を染めた一斤染が聴色の基準。中紅花・一斤染・退紅・桜色の順に濃い。当時女性性は紅色への願望が強くと、聴色も濃染になりがちであった。	宮中の反古紙をすき直した再生紙を薄墨紙、紙屋紙と呼んだ。一般に不吉な知らせを書くのにも薄墨を用いた。

							<p>薄紅は中紅よりさらに淡い紅染。下染に中紅と同量の鬱金丹をする、黄味がちの暖かみのある色。</p>	<p>濃香(香染)、丁子(モルッカ諸島原産のフトモモ科の常緑高木)と鉄分と灰汁を用いる。淡(薄)香、丁子染の無媒染の淡い黄褐色で、この色を香色と言う。香色、僧衣の色としては紫に次ぐ高位の色。香衣として使用したが、後世には黄色い僧衣に。丁子は濃い香色。</p>	<p>黄、黄蘗・支子・鬱金丹などにより染出。純色の黄色はない。</p>	<p>平安中期から中世にかけて、刈安・灰汁染の浅黄(あさぎ)と藍染の浅葱(あさぎ)とが交錯。</p>	<p>青鈍、喪服の色や尼僧の衣に使用。錫紵、親族の喪に服するときには天皇着用の鈍色。杉や檜を煎じて田土で媒染するか、墨染に藍染を薄く掛けた。</p>	<p>杜若「かきつけばな」が訛ったもの。本来その花の汁で摺染をしたことに由来。平安文学には重色として出ているが、中世以降の有職故実装束書に登場。</p>	<p>紅染の濃染は禁制。今様色、室町後期の文献によって濃淡の解釈異なる。</p>	<p>白粉に鉛白を使用。有毒のため使われなくなる。鉛粉(銀密陀)も鉛白も胡粉と呼んだ。</p>
							<p>紅梅、平安京に移ってから一般化。本来、紅花染の赤色素のみの染色。</p>	<p>黄赤、鮮やかな色はなく、明度・彩度ともに低い茶系統の色多し。</p>	<p>黄朽葉、秋末・初冬の服色。</p>	<p>苔・苔衣などが見えるが、僧侶や世捨て人の衣服を指し、苔色の服色ではない。色名の苔色は江戸時代から。</p>	<p>褐色・搗色・勝色、藍の葉を発酵させた「すくも」を臼で搗ちて染めること、又は藍を濃く染込ませるために被染物を搗つことに由来。</p>	<p>桔梗初出。青味の紫を表す代表的色名。平安時代には、重色・織色としては見えないが、染色名としては見えず。</p>	<p>葡萄染、紫と同じく紫根染になる。時代により染法異なる。</p>	<p>五倍子、染色に用いられ始める。五倍子は、白膠木(ヌルデ)の小枝や茎などにヌルデノミフシアブラムシが寄生してできる虫瘤。</p>

								<p>真赭・真朱、中古以降、元の意味が分からなくなり、類推解釈されて赤色・蘇芳色などを指すようになったか。</p>	<p>染色の基準が灰汁媒染になったため、灰汁媒染した椽染を単に椽、鉄媒染した椽染を黒椽と言うようになる。</p>	<p>山吹色、黄色系統の代表。文学にも多出。</p>	<p>青磁・秘色伝来。唐代の越州窯では極めて優秀な青磁が作られ、日本にも渡来。その色を秘色と呼び、宮廷では特別に珍重。染色の秘色は、藍の浅染による薄い青色。</p>	<p>水色系統、平安文学には水色と水縹の両方が現れる。</p>	<p>紫苑流行。「紫苑の織物」「紫苑の指貫」など、文学にも多出。</p>	<p>桜、色名としてはまだ。女性専用の色ではなく、貴公子の狩衣や武将の小袖にも用いた。</p>	<p>黒、平安時代には白椽柴の鉄媒染で染めた。</p>
								<p>紅葉色隆盛。襲色目に紅紅葉・青紅葉・黄紅葉・初紅葉・蝦手紅葉・櫨紅葉など、多様。</p>	<p>支子、色名として初出。</p>	<p>波白色の表記、「櫨色」となる。別名の黄櫨(きはじぞめ)初出。</p>	<p>苗色、天皇のまわりを世話する蔵人が着た衣色か。</p>		<p>菫、襲色目の名に登場するが、文学には染色としては未出。</p>	<p>唐紅・韓紅・韓紅花・辛紅(全て「からくれない」)、染色名に初出。奈良時代の「紅の八塩」に相当。</p>	
								<p>忘れ草・萱草、紅の色合いを落とした色として、服喪の色とされた。</p>	<p>椽皮色初出。椽の皮に限らず、杉・桜などの樹皮の色、椽の皮や椽の枝葉などを用いた染色、蘇芳染による黒味がかかった色など、諸説あり。この種の色を木色・樹皮色とも言った。</p>		<p>深緑・常盤色、平安時代頃より、永久不変の象徴である松の形容に用いられる。木賊色よりも黄味がち。</p>	<p>二藍、藍と紅の二種の藍(染料全般の代名詞)で染めたの意。夏用の衣服の色となり、文学にも登場。若年ほど藍を淡く、壮年ほど紅を淡く染めた。</p>	<p>牡丹、『枕草子』『栄花物語』に登場。牡丹唐獅子文、仏家や貴紳に愛用される。色名としては、平安末期に登場。</p>		

					黄櫨、天皇の晴(公)の袍色と制定される。その後も天皇の御衣の色・絶対禁色。時代によって微妙に異なり、現在まで続く。青白椽(天皇の日常の袍色)と同様、光線によって色が変る二色性がある。天位を象徴する色として真昼盛夏の太陽の輝きを表し、袍の地文には桐・竹・鳳凰、中世に麒麟が加わった。							
			820									
			821									
			822									
淳和			823									
		天長	824									
			825									
			826									
			827									
			828									
			829									
			830									
			831									
			832									
仁明			833	『令義解・衣服令』 清原夏野・小野篁		椽墨衣は、 平安時代の 黒椽の色。 「家人奴婢。 椽・墨衣」						
				『令義解・注』						「青碧者、碧亦青色也」 青と碧を同類と見る。		
				『令義解・衣服・皇太子条』	黄丹 「皇太子礼服～(略)～ 黄丹衣。牙笏。白袴。白帯。深紫紗褶」							

清和	良房太政大臣	天安	856																			
			857																			
		貞観	858																			
			859																			
			860																			
			861																			
			862																			
			863																			
			864																			
			865																			
			866																			
			867																			
			868																			
			869																			
			870																			
			871																			
			872																			
			873																			
			874																			
			875																			
876																						
陽成		元慶	877																			
			878																			
			879																			
			880																			
		881																				
		882																				
光孝		仁和	883																			
			884																			
			885																			
			886																			
宇多	基経関白	寛平	887																			
			888																			
			889																			
		890																				
		891																				
		892																				

茜や紅を支子と混ぜて染める色全てに禁制。黄丹が正式に禁色となる。

仁和年間(885~889)、紅花染禁制。しかし、徹底せず。

醍醐

		893										
		894										
		895										
		896										
		897										
	昌泰	898										
		899										
		900										
	延喜	901										
		902										
		903										
		904										
		905	『古今和歌集』 醍醐天皇	緋色 「耳なしの山のくちなし得てしがな思ひの色の下染めにせん」 読人不知				浅緑 「浅緑いとよりにかけて白露の珠にもぬける春の柳か」 僧正遍照		紫 「紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」 読人不知	桜色 「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちの形見に」 紀有朋	空五倍子色 「世をいとひこのもとごとくにたちよりにつつぶしぞめの麻のきぬなり」 読人不知
			同上	柳・桜 「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」 素性法師							紅 「人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ」 読人不知	
			同上					常盤緑 「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」 源宗子			唐紅 「ちはやぶる神世もきかずたつた川から紅に水くくるとは」 在原業平	
		906										
		907										
		908										
		909										
		910										
		911										
		912										
		913	『二十卷本延喜十三年亭子院歌合(裏書)』					「帝の御装束、檜皮色の御衣にぞがいろの御袴」				

				浅蘇芳 「浅蘇枋綾一疋。蘇枋小五両、酢一合、灰八升、薪六十斤」						桃染 「尉はみな皂…、衛士は皂…、末額は桃染布衫…」	
					『延喜式・弾正台』		因獄司(刑部省管下。逮捕された罪人の刑、囚禁しておく牢屋の管理)・物部の刀の緒の色。	白椽、公私奴婢や女従に着用が聴される。			
					『延喜式・祝詞・龍田風神祭』		赤丹・鉛丹 「遠御膳の長御膳と赤丹乃穂に聞こし食す五の穀物を」				
				928							
				929							
				930							
朱雀	忠平摂政		承平	931	『倭名類聚抄』(～938)源順		宍 「肉・和名しし之々、肌膚之肉也」				
				932							
				933							
				934							
				935	『土佐日記』(1935頃～45頃)紀貫之		蘇芳 「松の色はあをく、いそのなみは雪のごとくに、かひのいろはすはうに、五色にいまひといろぞたらぬ」				
				936							
				937							
			天慶	938							
				939							
				940							

村上	忠平関白		941																				
			942																				
			943																				
			944																				
			945																				
			946																				
		天曆		947																			
				948																			
				949																			
				950																			
				951																			
				952																			
				953																			
				954																			
				955																			
				956	『後撰和歌集』(951?～956?) 村上天皇・大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城(梨壺の五人)	緋色 「玉くしげ二年会はぬ君が身を緋(あけ)ながらやはあらむと思ひし」 源公忠																	
		天徳		957																			
				958																			
				959																			
				960																			
		応和		961																			
			962																				
			963																				
	康保		964																				
			965																				
			966	『宇津保物語』(?) 源順?					「うちきに、やなぎのおり物の薄きおりもの重ねてきて」	柳色	桔梗色 「きかう色のをり物のほそなが」	二藍	今様色	薄鈍 「うすにびのはりあはせの御ぞたてまつりて」 (国譲上)									
				同上						若緑 「わかみどりふた葉に見ゆる姫松の嵐吹きたつよをも見てしが」 (蔵開上)													

1000	襲ねの色目、10世紀以降に成立か。9～10世紀成立の『土佐日記』や『伊勢物語』には襲ねの色に関する記述がないのに対し、10世紀半ば以降の『落窪物語』や『源氏物語』には襲ねの色目の記述があるため。								
	『枕草子』(?) 清少納言		楊梅色 「見るにことなることなきものの、文字に書いてことごとしきもの覆盆子(いちご)。鴨頭草(つゆくさ)。…やまもも」	黄朽葉 「黄朽葉の織物、薄物などの小袿着て」(野分のまたの日こそ)	緑衫(ろくそ)	青 「いせの物語なりやとてみれば、あおきうすやうに、いとよげに書き給へり。」(頭の中將の、すずるなるそら言を聞きて)	竜胆、清少納言が『枕草子』の中でお気に入りのお花として入っている。	紅梅 「すさまじきもの。昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣」 「木の花は、こきもうすきも紅梅。」	
	同上	躑躅・桜・青朽葉・朽葉 「汗衫(かざみ)は春は躑躅。桜。夏は青朽葉。朽葉」	刈安 「薄様色紙は白き、むらさき、赤き、刈安染。青きもよし」	夏虫色・瑠璃色 「指貫はむらさきの濃き、萌黄、夏は二藍、いと暑きころ、なつむし色したるもすずしげなり」 平安文学中、唯一昆虫に因んだ色名。	青 「六位の蔵人。いみじき君達なれど、えしも着給はぬ綾織物を、心にまかせて着たる、あおいろ姿などのめでたきなり。」 (めでたきもの)	藤色 「藤の花は、しなひながく、色こく咲きたる、いとめでたし」 「めでたきもの」の典型として、「色あひふかく、花房ながく咲きたる藤の花の、松にかかりたる」 「なまめかしもの」として「むらさきの紙を包み文にて房長き藤につけたる」	紅梅 「御返し、紅梅の薄様に書かせ給ふが、御衣の同じ色にほい通ひたる」(278)		

三条

寛弘	1004									黒、紫と緋に代って四位以上の服色となる。(寛弘～)
	1005									
	1006	『拾遺和歌集』 花山法皇?・一条天皇?・藤原公任?								
	1007									
	1008									
	1009									
	1010	『紫式部日記』(?) 紫式部				支子 「なかなる衣ども、例のくちなしの濃き薄き」				一斤染・青・赤 「色ゆるされたる人々は、例の青いろ赤いろの唐衣に」
	1011	『和泉式部集』(?・11世紀) 和泉式部						露草 「露草にそめぬ衣の以下なれば うつし心もなくなしつらん」(上)		
	1012									
	長和	1013	『源氏物語』(?) 紫式部	葡萄・蘇芳 「紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に、御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに」(若菜下)	萱草色・鈍色 「紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単衣、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて」(幻)	山吹色・薄色 「やまぶき、うす色など、花やかなる色あひ」 「山吹の桂」	柳色・萌黄色 「柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小桂着て、羅(うすもの)の裳のはかなげなる引きかけて、ことさら卑下したれど」(若菜下)	浅縹・搔練 「浅縹の海賦のおり物、おりざまなまめきたれど匂いやらかなるにいと濃き搔練具しては」(玉鬘)	若紫登場。 『伊勢物語』にも登場する。	紅梅・葡萄・今様 「濃き赤きなど、さまざま選らせたまひつつ、……紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとは、かの御料」(玉鬘)

	同上	<p>香色(丁子色) 「宮もおはしけり。丁子に深く染めたる薄物の単を、こまやかなる直衣に着たまへる、いとこのましげなり。」(蜻蛉)</p>	<p>萱草色 「ほどなき相(あこめ)人よりは黒う染めて黒き汗衫(かざみ)くわむざうの袴など着たるもをかしき姿也」(葵)</p>	<p>青鈍・支子色 「空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見付けたまうて、御料にある梶子の御衣、聴し色なる添へたまひて」(玉鬘)</p>	<p>青磁、「あをじ」と読む。</p>	<p>浅葱色 「浅葱にて殿上にかへり給ふを、大宮は飽かずあさましき事とおぼしたるぞ」(少女)</p>	<p>紫苑・赤朽葉、 「おほきやかなる童の濃きあこめ、紫苑の織物かさねて、赤朽葉の羅(うすもの)のかざみいというう馴れて」(少女)</p>	<p>今様色 「いまやういろの、えゆるすまじく艶なう古めきたる直衣の裏表ひとしうこまやかなる」(末摘花) 「紅梅のいといたく紋浮きたるに葡萄染の御小袿今様色のすぐれたるは…」(玉鬘)</p>	<p>鈍色 「夕暮の雲のけしき、鈍色に霞て」(柏木)</p>
	同上	<p>蘇芳色 「左方は、紫檀の箱に蘇芳の華足(けそく)、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の薄絹…」(絵合) 蘇芳で彩色された木工品</p>	<p>檜皮色 「姫君、檜皮色の紙のかさね、ただいささかに書いて」(真木柱)</p>		<p>浅緑 「あさみどりの薄様なる文の、押し巻きたる端みゆるを」(若菜下)</p>	<p>縹色 「浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の御方に」(玉鬘)</p>	<p>二藍 「直衣こそ、あまりくつてかろびためれ。非参議のほど、何となき若人こそふたあひはよけれ」(藤裏葉)</p>	<p>撫子・若苗色 「濃きうちぎに、撫子とおぼしき細長、わかなへ色のこうちぎきたり」(宿木)</p>	<p>青鈍 「経、仏の飾り、はかなくしたる関伽(あか)の具などもをかしげに、～(略)～あをにびの几帳、心ばへをかしきに」(初音)</p>
	同上	<p>赤白椽 「かの御賀の日は、赤き白つるばみに、葡萄染の下襲を着るべし」(若菜下) 「青き赤き白椽、蘇芳、葡萄染など、常のごと」(藤裏葉)</p>	<p>栗色 「落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたくしける色あひしたる、あはせの袴」(行幸)</p>		<p>深緑 「松原のふかみどりなるに、花もみちをこぎ散らしたると見ゆるうへのきぬのこきうすき、数知らず」(霽標)</p>	<p>青鈍</p>	<p>棟 「下仕へはあふちの裾濃の裳」(蛭)</p>		

		1035	『関白左大臣頼通歌合』						杜若色 「雑色源頼 実執地敷 三重杜若色 浮線綾、以 象眼為裏、 重其上縫葦 手、以其裏 銀鏤文」			
後朱雀		1036										
	長曆	1037										
		1038										
		1039										
		1040										
長久	1041											
	1042											
	1043											
	1044											
寛徳	1045											
	1046											
後冷泉	永承	1047										
		1048										
		1049										
		1050										
		1051										
		1052										
	天喜	1053	『夜半の寝覚』(?) 菅原孝標女?						水色 「こくうすく水 色なるを下 にかさねて」	藤色・青朽 葉 「藤のこきう すき御衣、 青朽葉の御 小袒を着給 たる」		
			1054									
		1055										
		1056										
1057												
康平		1058										
		1059										
		1060										
	1061											
	1062											
		1063										
		1064										

堀河	白河上		1086	『後拾遺和歌集』 白河天皇・藤原通俊																		
		寛治	1087																			
			1088																			
			1089																			
			1090																			
			1091																			
			1092																			
		師通	嘉保	1093																		
				1094																		
			永長 承德	1095																		
	1096																					
	忠実内覧	康和	1097																			
			1098																			
			1099																			
			1100																			
		1101																				
		1102																				
		1103																				
	忠実	長治	1104																			
			1105																			
嘉承		1106																				
		1107																				
天仁		1108																				
		1109																				
天永	1110	1110																				
		1111																				
	1112																					
	永久	1113																				
		1114																				
1115																						
1116																						
1117																						
元永	1118																					
	1119																					
鳥羽	白河法	保安	1120	『今昔物語集』(?)																		
忠通		1121																				

萱草は忘れ草・醜の醜草と言われる。「兄弟二人殖萱草紫苑語」

黒・紺「年四十ばかりなる男の鬚黒きが……紺の水早を着て」

浅黄「年五十ばかりの女の无下(むげ)の下衆にも非ぬが、浅黄なる張単(はりひとへ)に賤の袴着て」(24・7)

紫苑は思い草・鬼の師子草と言われる。「兄弟二人殖萱草紫苑語」

安徳	高倉上		1180	『山家集』 西行の歌の後人撰						空色 「空いろのこ なたを裏に たつ霧の表 に雁のかけ るたまづさ」 (上)	濃色 「紅にあらぬ 袂のこき色 は焦がれて 物をおもふ なりけり」 (下)	薄紅 「類ひなき思 ひいではの 桜かなうすく れなぬの花 のにほひ は」	
	後白河法	養和	1181										
		寿永	1182										
		師家	1183										
		基通	元暦	1184									
著作権者：岩崎純一													

天皇		元号		西暦									
						全般	緋、目立ち易さや重厚さから武士の威し・陣羽織・旗・馬具に使用。	布や紙に渋を塗って防水した柿渋色、中世の山伏の装束に使用。	土器色、初出。土器の色だけでなく、着物の色にも使う。土器は、釉をかけないで焼いた陶器。古くは食器、後に行灯の油皿として使用。	青苔初出、武士に愛好される。	青白椽、麴塵・山鳩色・魚綾（魚稜）とも呼ばれる。山鳩色、平安朝には記録がないが、『平家物語』の安徳天皇の最期の段に登場。魚綾は、青白椽が天皇の御料（ぎよりょう）であり、その音のみが伝えられたことから。		綸旨を書くのに綸旨紙を使用。
						【鳥に由来する色名増える。】	染法の難しい茜染の緋よりも、支子や鬱金などの黄染の上に紅花をかけて染め出した紅緋が多く用いられた。今日の緋色は、紅緋系統を指す。	海松色、鎌倉武士や室町文化人に流行。	鶺鴒色初出。	木賊色、冷たく落ち着きがあるため、狩衣、武家の服色、高齢者の服色に流行。	浅黄、青系の色に移行。		鎌倉以降の白の顔料は、貝殻を焼いて作った胡粉を使用。鉛白は色名に名残。
									萌黄、『平家物語』などでも萌黄威しの鎧が若武者に用いられ、貴婦人達の表着や打衣などにも使われた。	軍記物に「かち」の直垂に黒糸か黒革威しの鎧を着た武者達が登場。「勝ち」に掛ける。郎党達が着用するのは徒歩（かち）色。		黒、五倍子の鉄媒染で染められるようになる。	

義時

	1205	『新古今和歌集』 後鳥羽院・源通具・藤原 有家・藤原定家・藤原家 隆・藤原雅経			支子色 「九重にあら で八重咲く 山吹のいは ぬ色をば知 る人もなし」 円融院	松葉色 「小塩山神 のしるしを松 の葉に 契 りし色はか へるものか は」 慈円	花染・移し色 「折ふしもう つればかへ つ世のなか の人のここ ろの花染の 袖」 俊成女 のちの露草 色			
		同上				深緑 「深緑あらそ ひかねてい かならむ間 なくしぐれの ふるの神 杉」 後鳥羽院				
建永 承元	1206									
	1207	『最勝四天王院障子和 歌』						緑色 「むさし野の ゆかりの色 もとひわび ぬみながら 霞む春の若 草」藤原定 家		
	1208									
	1209									
	1210									
建暦	1211	『喫茶養生記』 栄西		茶の効能						
	1212									
建保	1213	『宇治拾遺物語』				木賊色・青 「刑部録とい ふ斥官、び んひげに白 髪まじりたる が、木賊の 狩衣に、襖 (あお)袴着 たるが、いと ことうるはし く、さやさや となりて」 (14・7)				

順徳

仲恭→後堀河	後高倉上	泰時	北条政子	承久	1214	『東北院職人歌合』(この年成立か。13世紀後半説あり。)					花浅葱 「うとくなる 人の心の花 浅葱いくしほ 染めて色あ がるらん」 (7)				
					1215										
					1216										
					1217										
					1218										
	後堀河上		九条頼経	貞応	1222	『保元物語』(?)		朽葉色 「月数という 鏡の、朽葉 色の唐綾に てをどしたる を」							
					1223										
					元仁	1224									
					嘉禄	1225									
					1226										
四条	後堀河上	泰時	九条頼経	安貞	1227										
					1228										
					寛喜	1229	『飾抄』 土御門通方								
					1230										
					1231										
					貞永 天福	1232						緑青 「春よりさき にしためぐ みたるわか 葉のろくしゃ う色なるが、 ときどきみえ たるに」			
						1233	『建礼門院右京大夫集』 建礼門院右京大夫								
						文暦	1234								
						嘉禎	1235	『新勅撰和歌集』(文暦二)							
						1236									
				暦仁	1238	『正法眼蔵随聞記』(?) 懐奘		黄檗色 「黄檗に染 めたるもの は黄なるが 如く」							

					1294																
					1295																
					1296																
					1297																
					1298																
後伏見	伏見上				正安	1299															
						1300															
後二条	後宇多上	師時				1301															
					乾元	1302															
					嘉元	1303	『新後撰和歌集』 後宇多院・藤原為世														
						1304															
						1305															
					徳治	1306															
						1307															
花園	伏見上		守邦親王	延慶	1308																
						1309															
						1310															
					応長	1311															
		宗宣→ 熙時		正和	1312	『玉葉和歌集』 伏見院・京極為兼															
	後伏見上					1313															
						1314															
						1315															
						1316															
					文保	1317															
						1318															
後醍醐	後宇多上			元応	1319																
						1320	『統千載和歌集』 後宇多院・藤原為世														
				元亨	1321																
						1322															
						1323															
				正中	1324																
						1325															
				嘉暦	1326	『統後拾遺和歌集』 後醍醐天皇・藤原為藤・ 為定															
						1327															
						1328															
				北朝	元徳	1329															
				元徳		1330															
					元弘	1331															
光厳	後醍醐			正慶		1332															
						1333															
著作権者：岩崎純一																					

天皇		元号		西暦									
						全般	南蛮船によって輸入された羅紗の鮮明な緋色、それまで日本になかった色なので猩々緋と名付けた。	栗色・栗皮色初出。	鳥の子色、中世以降、狂言の帷子などに多用。				焼いた貝殻の粉末(炭酸カルシウム)を胡粉と呼び、白色顔料に用いた。
							弁柄、南蛮貿易によって顔料や製法が伝えられる。	土器色 『狂言・富士松』 「手に持てるかわらけ色のふるあわせさけごとにあるつぎめなりけり」	戦国時代に、灯油が荳胡麻(えごま)油から菜種油に変わる。日本の春の原風景を彩る菜の花畑は、これにより出現。菜の花とは、アブラナに限らず、花が良く似ている蕪、小松菜なども指す。菜の花色(菜種色)と菜種油色は異なる色。				檳榔子染、南北朝時代初出。熱帯産シュロ科の檳榔子の実の煎汁と楊梅皮の煎汁を絹に引染し、さらに鉄漿を引き、その工程を繰り返した黒染の黒色。楊梅皮・柘榴・五倍子の煎汁でも染める。京都では柘榴を使用せず、楊梅皮での代用。下染に藍染を施すことによって美しい黒色となる。
								狐色初出。					空五倍子色登場、凶色とされる。
								鳥の子色初出。					
						【室町時代末期、染色業(紺屋)が成立】		伽羅色初出？ 伽羅は沈香のうち最高級品。					

光厳	後醍醐	建武 中興	建武	南朝	1334																							
光明	後村上	尊氏	曆応	建武	建武	1335																						
					延元	1336																						
						1337																						
						1338																						
						1339																						
				崇光				興国	興国	1340																		
										1341																		
									康永	康永	1342																	
											1343																	
											1344																	
貞和	貞和	1345																										
	正平	正平	1346																									
			1347																									
			1348																									
			1349					『風雅和歌集』 花園院・光厳院																				
後光厳				観応	観応	1350																						
						1351																						
					文和	文和	1352																					
							1353																					
							1354																					
				延文	延文	1355																						
						1356																						
						1357	『筑波問答』(1357~72 の間) 二条良基																					
					義詮	義詮	1358																					
							1359	『新千載和歌集』 後光厳天皇・藤原為定																				
後光厳				康安 貞治	康安	1360																						
						1361																						
						1362																						
						1363																						
						1364	『新拾遺和歌集』 後光厳天皇・二条為明・ 頼阿																					
						1365																						
						1366																						
						1367																						

藍
「あゐより出
でてあゐよ
りあをく、水
より出でて
水より寒し」

		慶長	1596	天鷲絨、京都で織られ始める。(慶長)															
			1597																
			1598																
			1599			諺「朱に交われれば赤くなる」、この年初出か。													
			1600																
			1601																
			1602																
著作権者：岩崎純一																			

天皇		元号		西暦										
						江戸通期全般	<p>茜染は、染法が難しく次第に廃れる。江戸時代の染色文献の茜染はほとんど蘇芳染か。</p>	<p>柿渋色、略して柿と呼ばれるようになる。「～柿」なる色は、中世からの柿渋色の变化したものの。</p>	<p>近江刈安、品質良く有名に。八丈島の八丈刈安は小鮎草を指し、八丈絹(丹後とも)に使用。</p>	<p>煤竹、江戸時代を通じて愛用。</p>	<p>藍染の色、薄い方から順に藍白・瓶覗・浅葱・縹・藍・紺。浅葱流行。吉原で江戸勤番の田舎侍が「浅葱裏」と呼ばれ、野暮の代名詞となる。</p>	<p>今紫・江戸紫は、蘇芳染や紫根染などによる青味の紫。「江戸紫に京鹿子」江戸紫は、紫草が『伊勢物語』の昔から武蔵野のシボルであり、紫は江戸の色と強調する意で生じた。歌舞伎の助六の鉢巻の色。</p>	<p>京紫は、紫根染の伝統的な赤味の紫。一般には、江戸紫のほうが人気。</p>	<p>五倍子、既婚女性のお歯黒の材料に使用。</p>
						【復古的氣運高まる】	<p>梅屋渋(紅梅の根を切り、濃く煎じた汁に、榛皮の煎汁を加えたもの)、江戸時代の家庭茶染の主要な染料に。</p>	<p>褐色(かっしょく)初出。中世の軍記物などに出てくる藍染の褐色(かちいろ)と区別のため、茶色の一般化に連れて茶褐色などが多くなる。</p>	<p>金色、山吹色とも呼ばれる。</p>	<p>苔色初出。それより明るい柳茶やそれより暗い海松茶も流行。</p>	<p>【藍色による粋の文化】</p> <p>【紺屋(こうや)、染色業の通称となる】</p>	<p>桔梗、修飾語を伴って流行。紺桔梗・紅桔梗・桔梗紫・桔梗納戸・桔梗花色・桔梗鼠など。</p>	<p>桑色・桑染のうち桑の実の濃い紫色を桑の実色と呼んで区別したのは江戸時代か。一方、桑子(実)の汁を用いて摺染した赤黒色も桑染と呼んだ。</p>	<p>銀色よりも自然に黒ずんだ燻(いぶし)銀、金色よりも銀色に高尚な美があるとの意識。</p>

							<p>鬱金で下染めしたものを紅花で上染めして仕上げた紅絹(もみ)、絹布・袖裏・胴裏に多用されたときの呼び方。江戸時代を通して女性に流行。</p>	<p>桑色・桑染、桑の木の一染から、楊梅皮を加えた染色となり、桑茶と呼ばれて流行。</p>	<p>鶺鴒色、江戸時代の染色文献に「黄蘗の下染に浅葱に染める」とあり。</p>	<p>山葵色、近世からの色名か。</p>	<p>干草色、丁稚の股引や庶民の日常着あるいは下染の色として流行。</p>	<p>紫根染の紫が禁制になり、蘇芳染の紫が多くなると、その似紫に対して、伝統的な紫根と灰汁媒染で染めた色を本紫と言った。</p>	<p>桜色・鶺鴒色・鶺鴒羽色初出、染色始まる。それよりも少し濃い色の桃色も初出、蘇芳染で、鶺鴒色と共に女性の下着や長襦袢の色に使用。同系統の撫子色の名は、桃色ほど一般に使われず。</p>
							<p>「紅～」の色名、多出。</p>	<p>丁子茶初出。平安装束の丁子からの派生だが、丁香ではなく、楊梅や梅による代用染色。</p>	<p>山吹色、大判小判の黄金色の形容にも使う。</p>		<p>熨斗目色。熨斗目は練緯(ねりぬき)の一種。江戸時代、士分以上の礼装。無地に袖の下部と腰の辺にだけ縞や格子を織り出したもの。袴の下に着た。熨斗目の地色が概して藍染の色であったので、そのような鈍い青色に用いられた。</p>	<p>槿花色、江戸時代には蘇芳の鉄媒染で染めたか。</p>	<p>唐紅、唐緋色と名を変える。</p>

							<p>樺色、蒲色、樺茶、蒲茶、椀茶初出。樺はウワミズザクラなどの樺桜の樹皮の色、蒲は水草のガマの穂の色によるが、同じ色として使われる。</p>	<p>小堀遠州、赤茶や鶯色を愛用し、遠州茶と名付ける。</p>	<p>唐茶・枯茶、外来の材料・丁子などによる染色。一般的には楊梅による染色に移行。江戸時代を通じて染法異なる。</p>						
							<p>紅朽葉初出。赤朽葉は平安時代より。</p>	<p>鶯色・黒鶯、小袖雛形本の地色に登場。</p>	<p>土器色 「深草は土器色の冬野哉」 (俳諧)</p>						
								<p>紅鬱金、前期に流行。</p>	<p>玉子色の染色始まる。小袖に流行。鬱金染をやや薄くした染色。</p>						
					江戸中期全般	潤朱、中期文学に登場。	<p>【茶色による粋の文化】 煎じ茶から出た赤茶系と碾茶から出た緑茶系があり、関西では赤茶系統の色が主に流行。茶の葉にこだわらず、楊梅などで染めた色にも「茶」の名を付けた。</p>	<p>鶯茶、雛形本の小袖の地色に登場。鶯萌黄、雛形本には見当たらないが、中期には広く用いられたか。</p>	<p>青竹、染色初出。</p>	<p>御納戸、多出。納戸の幕、納戸を管理する役人の衣裳、納戸にしまっている藍染の反物、藍の下染をしない納戸色のうち代表的な藍御納戸が一般的な納戸色となった説など、多説。</p>	<p>江戸納戸 『諸色手染草』江戸納戸 五倍子（ふし）の煎じるにて一べんそめ。だしがねのしるに水少し入染めてよし。」</p>	<p>エビがブドウと呼ばれるようになり、葡萄色（エビイロ）の色調も暗くなって葡萄色（ブドウイロ）と呼ばれるようになった。葡萄鼠は、中期頃には、まだ「エビネズ」と呼ばれた。葡萄鼠は浮世絵美人の着物の色にも多出。</p>	<p>【「～鼠」の色名登場】</p>		

							<p>樺茶、染色に流行。茶色の流行に伴い、樺色も樺茶と呼ばれて流行するが、染色では両者を区別。</p>	<p>遠州茶、染色始まる。遠州鼠は、後世の人による美称。</p>	<p>鶯色よりも鶯茶、千歳緑よりも千歳茶が流行。鶯茶が薄い黄緑色に移行。単に「せんざい」とある場合、千歳茶のことか。</p>	<p>黄海松茶・海松茶・藍海松茶・海松藍色、中期・後期の染色資料に多出。</p>			<p>桜鼠、中後期の見本帳に登る場合も、染法は見当たらず。</p>	<p>「錆～」多出。「侘び寂び」の「寂び」に通じるか。</p>
							<p>紅樺、中期頃の小袖の地色に使用。紅樺茶とあまり区別なし。</p>	<p>伽羅茶・伽羅煤竹、伽羅色から派生。</p>	<p>黄茶、中期以降の流行名。楊梅の樹皮で染色された黄味の茶色。</p>	<p>御召茶 「下染薄藍、かやの中へ、やしやポッチリ、水等分、鉄醬、水等分」</p>			<p>海老茶、江戸時代の書物には染法の記載見当たらず。中期の見本帳に「海老皮茶」との表記あり。</p>	
							<p>柳茶、多出。</p>	<p>柿渋色・柿色歌舞伎の定式幕(萌黄・柿・黒)、市川団十郎とその一門や常磐津の連中の袴や小道具などに、柿渋と弁柄で染めた柿色が使われ、俗に団十郎茶と言う。江戸時代、柿色と言えば団十郎茶を指す。柿の実の色に因んだ「柿色」とは異なる。「柿の素襖の羽づくろい」</p>	<p>蘭茶の流行。蘭は木蘭と同意語なので、木蘭を蘭茶と呼んだと思われる。</p>	<p>柳煤竹登場。</p>				

	元和			憲法染、この頃初出か。京都の染匠兼吉岡流剣法の始祖吉岡直綱(号・憲法)の考案との説。憲法黒茶も同様か。江戸初期、楊梅だけで染めた黒茶色を考案、後に藍下染の上に楊梅で黒茶を染めたとされる。一説には、櫟の実などタンニン質の多い煎汁を鉄媒染で布に定着させた。代々吉岡家に伝わる秘伝とされた。豊臣方について籠城。落城後は家伝の一つである染物業に専念。						
		1615	大坂の役							
		1616		柿色 初代柿右衛門、日本初の色絵磁器の焼成に成功(有田焼)						
		1617								
		1618								
		1619								
		1620								
		1621								
		1622								
家光		1623								
	寛永	1624								

明正

後光明

1625									
1626									
1627									
1628									
1629									
1630									
1631									
1632									
1633									
1634	『尤之双紙』(仮名草子) 斎藤徳元		茶色						
1635									
1636									
1637	◇『天工開物』 宋応星						天青色 藍の淡染の 上に蘇芳水を かけて染色と の記述。日本 の「空色」、類 似の染法か。		
1638	『毛吹草』 正保2年刊 松江重頼	栗梅 「色こきは栗 梅ぞめの紅葉 哉」(6)							
1639									
1640									
1641									
1642	『大蔵虎明本・ 吃』 大蔵弥右衛門虎 明書写					鳥の子色 「鳥のこいろ のかたびら の、かたのく わつとさけた るに」			
1643								この頃、庶民 の高価な本 紫、禁制。禁 制の本紫に対 して似紫登 場。	

		『紺屋茶染口伝』 日本に現存する 最古の染織技法 書。				天鷲絨 「びろうどう。 したそめをこ んにてそめ て。うへにかり やすにて五六 ぺん程つけ。 右とくさのごと くに染申候」			
	1667								
	1668								
	1669								
	1670								
	1671								
	1672								
	延宝								
	1673	浄瑠璃土佐節 『染色盡』(1673 頃～87頃)				鶯染 「咲くや花色 花に鳴く、鶯 染の声あげて …」	干草色 「絞り干草の 妻籠も」	藤鼠 「恋をすす竹 藤鼠」	
							瑠璃紺、江戸 の男女の小 袖に流行。 (延宝～天 和) 紺色よりは明 るい染色。		
	1674	『清少納言枕草 子装束撮要抄』 壺井義知				夏虫色 「夏むしのい ろしたるとは、 るりいろをい ふにや」			

								聴色・許色・一斤染 「仍 深紫深紅ヲ禁色ト云。其浅キ色ハ制ノ限ニアラス。ユルシ色ト云フ」	
1675									
1676									
1677									
1678	『色道大鏡』 藤本箕山		江戸茶 「(遊郭に通う客の)帯は黒きを最上とす。茶色またよろし。茶の中にも、江戸茶、黄唐茶を制す。」 廓の遊客の衣服や帯の色に煤竹も推されている。						

		1679	◇『芥子園畫傳 (かいしえんがで ん)』				梅花片という 石青の一種を 乳鉢に入れ、 水を加えて乳 棒で擦り、皿 にうつして、粒 子の細かいも のから順に、 頭青、二青、 三青と選り分 ける(水飛法) との記述。頭 青は白群青、 二青は群青、 三青は紺青に 相当。群青の 名は古代日 本にもなく、紺 青より淡い青 は全て白青と 呼んだ。		
綱吉		1680							
	天和	1681		洗柿の染色 流行(天和)	宗伝唐茶・宗 伝茶、雛形本 に登場。(天 和～) 宗伝 は、京の染め 師の名。				赤紅 鹿の子染の 流行(天和～ 貞享)
				緋綸子の流 行。					
		1682	『好色一代男』 (浮世草子) 井原西鶴	潤朱 「うるみ朱の 煙草盆に炭団 (たどん)の埋 火絶えず」	礪茶 「十五六なる 少人の、との 茶小紋の引つ かへし。かの こ縺子のうし ろ帯」				

貞享	1684	明暦の大火	曙色、明暦の大火による衣服不足を早急に補うためさらに模様などを工夫して創作された寛文小袖の曙染のぼかし部分の色に由来か。または、江戸時代に東雲色、明治以降に曙色の呼称か。インド茜で染めた。			江戸深川、明暦の大火後に富岡八幡宮を中心に岡場所の享楽街を生んだ。その遊郭の芸者は辰巳芸者とも呼ばれ、意気と俠気を売り物とした。深川鼠が粋な色として流行。		
		『諸艶大鑑』井原西鶴		鶯茶 「紋無しの鶯茶のものを」				
		『好色二代男』(浮世草子)井原西鶴			黄鬱金 「十八九なる大振袖の娘、肌には黄鬱金のひっかへし」 (5・5)			
	1685							
	1686	『好色五人女』井原西鶴						桃色 「帷子は広袖に桃色のうら付けを取出せ」
		『好色一代女』(浮世草子)井原西鶴			黄色 「さのみ見苦しからぬ目の中の雫を、黄色なる絹の切れにて、少しうつぶき、拭きたる風情」		似紫 「明野が原の茶屋風俗さりとてはおかしげに似せ紫のしつこくさまざまの染入」	鼠色 「帯は夜目に立やうに鼠色に左巻を五色にと」(6・3)
	同上			薄玉子色				

東山

元禄

		『好色三代男』 井原西鶴			玉子茶 「紋郡内の玉 子茶」					
1687		『男色大鑑』 井原西鶴		青茶・樺茶 「袖岡は黄な る肌着に青茶 樺茶の縞の 小袖をかさ ね」(8・3)				花紫 「藤の丸の内 に伊の字の御 所を、花紫の 大振袖につけ て」		
1688		『日本永代蔵』 (浮世草子) 井原西鶴	甚三紅、紅花 ではなく蘇芳 で染めたとの 記述。			藍海松茶染 色始まる。(元 禄～) これと 区別するた め、もとの海 松茶は特に素 海松茶と呼ば れる。	千草色、「千 種色」と表記。 着古した浅葱 色の着物を、 上からまた浅 葱色で染めか えした色との 説明。	若紫、若向き の明るい紫と して流行。		
			猩々緋 「本朝の織 絹、から物を 調べ、毛類は 猩々緋の百 間つづき」							
								浅葱色の流 行。(元禄)		
			友禪染生まれ る。紅色の刺 繍多用。	元禄初年以 降、「～煤竹」 多く派生。染 色本や雛形 本に多出。金 煤竹・銀煤竹 (紀州茶)な ど。特に宝永 頃まで。藤煤 竹は、江戸時 代前期から染 色あり。				友禪染生まれ る。月草色、 下絵の青花 紙の色に用い られる。		

1696	『当世染物鑑』	とうきん煤竹 「とうきんすす 竹 下ぞめも もかわ二而二 へんそめ、ほ しあげ 其うえ くろミ大ぶん かけ。あかね 一ぺん。また むめしる一ぺ んかけ。其上 いしばいミづ へ入。ほしあ げてよし。」	渋茶 「しぶちゃ下ぞ め ももかわ くろミ 大ぶん かけ。そのう へを いしば い ミずうすく かけてよし。」	新斎茶 「しんさいちや 下染ちくさい ろ。其うへ も もかわ二而二 へんそめほし あげ。くろミ大 ぶんかけ す すぎてよし」					
	同上		ないき煤竹 「ないきすす 竹 下染むね しる二而 一 ぺん染。少か ねくろミかけ すぎてよ し。又にいし 二而もよし。」	古茶 「ふるちゃ下 染ももかわに て染ほしあ げ、かねくろ み大ぶんにか け、上はわら のあくすこし かけてよし」					
1697									
1698									
1699									
1700									
1701									亜鉛華、絵具 としての使用 (18世紀～)
	『吉野忠信』(浄 瑠璃) 近松門左衛門			山吹色 「山ふき色の 重宝に事欠き 給ふお身では なし」					

		『文武五人男・四天王』(浄瑠璃) 近松門左衛門			鬱金 「名は曇りなき玉川の、露の光や山吹のうこんいにて候ひしが」				
1702		『染物屋覚書?』					京藤 「京ふじは濃すおう一度引。水へかねをくわへ引べし。…」	南京藤 「南京藤ハ水いろ之上へ濃すおう一返ほし付。二度めすおうかわかざる内かねを水へ入くるべし。其上を随分随分コイあくにて留。直に水へ入。」	京鼠 「柳茶は京鼠の上へ…。鶯茶は…京鼠を少し…」(下染の色として記載。)
		『奥の細道』 松尾芭蕉			若葉 「あらたふと青葉若葉の日の光」				
1703						尾形光琳、金箔を背景に群青や緑青をふんだんに使った画。『燕子花図』など。			

宝永	1704						◇世界初の合成顔料プルシアン・ブルー精製。ドイツ。やがて日本に船載。この色も紺青と呼ぶようになる。			
		『薩摩歌』(浄瑠璃)		栗色 「くり色の敲鞆 (たたきざや)、筆なりの中締めは、江州彦根の御大将」						
	1705	『万宝鄙事記』 貝原益軒		桑染 「桑ぞめ 桑の木をよき程に濃くせんじ、其煎じ汁にきぬをつけまきて、しぼらずに干す」(4・12)						

中御門				江戸茶 「江戸茶染 やまものの皮 と、はいの木の 葉とを煎 じ、五六返程 そめて、あげ さまに、一端 に付、明礬 (みょうばん) の末を、茶一 ぷく程かきま ぜ、染に右の 如くして染れ ば、江戸茶の 色少黄こげ色 也」(4・12)							
			同上								
			1706								
			1707	『丹波与作待夜 の小室節』(浄瑠 璃・世話物)	猩々緋 「猩々緋の道 中羽織白い所 は髪斗」						
			1708								
		家宣	1709								
			1710								
			正徳								
		家継	1711								
			1712								
			1713								
			1714								
			1715								
		吉宗	享保								
			1716				銀煤竹、小袖 に流行。(享 保)				

桜町			1734	『本朝世事談綺』 菊岡沾涼(せんりょう)						1652～55の頃「京の長者町、桔梗屋甚三郎というものの、茜(蘇芳のこと)を以つて、紅梅にひとしき色を染出す。また中紅と云」	
			1735								
		元文	1736			菜種油色、麻袴の色に流行。					
			1737								
			1738								
			1739	『装束色彙』(?) 荷田在満						「禁色トハ、其人其位ヨリ高キ色、又ハ其人其位ニテ用ユルコトヲ得ザル地合ナドヲ各禁色ト云ナレドモ、一統ニ禁色ト称スルハ深紅ノ色ナリ。又袍(ほう)ニテハ深紫モ禁色ナルト云ヘリ」	
			1740								
		寛保	1741								
			1742								
			1743								
桃園		延享	1744								
			1745								
			1746								
			1747								
		寛延	1748								
			1749								
			1750								

家重

光格	1778	『画図理解・丹青部(たんせいぶ)』日本最初の洋画論。佐竹曙山					「ベルレンスブラアウ(ブルシアンプルー)」に言及。自らも絹本著色に使用。		
	1779	『助六廓夜桜(くるわのよざくら)』(歌舞伎)					江戸紫 「江戸紫の鉢巻に、髪は生締め」		
		『廓中美人集・異見の段』(洒落本)					紺桔梗 「紺吉更(コンギキョウ)の茄子漬を一つくださみといふたは、私が素見に行た時、急度見届て置ました」		
	1780								
	天明	1781		鳶色、男子の服色に流行。紅鳶・紫鳶・藍鳶、紺鳶・黒鳶などは、鳶色から派生。この頃、鳶色とともに流行。(天明)	菜種油色、裏付き袴の色に流行。		高麗納戸初出。歌舞伎の大立者の四世松本幸四郎が「鈴ヶ森」の中で幡随院長兵衛の合羽に用いた色に由来。(天明～寛政)高麗は松本幸四郎の屋号の高麗屋による。この色は五世幸四郎にも受け継がれて流行。		

		1782							
		1783	『太平楽巻物』 (洒落本) 烏亭焉馬				柳茶 「やなぎちゃ のどんすのを びに、ちりめ んひとへの ぶっかさね」		
		1784		紅檜皮、この 年に初出か。					
			『安齋随筆』 伊勢貞丈				青丹 「青き土を青 丹と云ふは心 得られぬ様な れど、物の名 にも言語にも 転用傍通あり、…丹は物 を色どる物、 青土も物を色 どる物なる 故、丹を転用 傍通して青丹 と云ふなり。 赤きは丹の体 なり、物を色 どるは丹の用 なり…」	紫・杜若 「今江戸紫と 云ふ色はカキ ツバタの花の 色の如し是蒲 萄染なり、紫 蘇の色に赤き に青色を帯び たり」	
		1785							
家齊		1786							
		1787	『田舎芝居』(洒 落本) 森島中良		木蘭 「代官殿は高 宮縞の帷子に 紺生絹の羽 織、木蘭色の 野袴」				
		1788							
	寛政	1789					御召御納戸・ 御召茶・御召 鼠初出。(寛 政) 御召とは、家 齊が愛用した 縮緬の類。		

	『手鑑模様節用』	東雲色 「とき羽色、一名しのめいろ」	紅消鼠・黒柿色・紅納戸 「紅けし鼠、古名くろがき、また紅なんどもいふ」	黄枯茶 「黄枯茶、古名きはじぞめ、又もくらんいろに同じ、はじ紅葉のいろか」	威光茶・柳茶 「威光茶。或は柳茶ともいふ」	湊鼠・深川鼠 「みなと鼠 此ころ流行して深川ねずミといふ」 湊鼠、大坂の湊村で作られて、壁や襖の腰貼りなどに使われた湊紙に由来するとの説あり。	紅湊・紅碧・紅掛空色 「紅みなと」「紅碧 俗にべにかけそらいろといふ」 これらの色、人気の藤色に似ており、中後期に流行か。	紅掛花色 「紅かけ花いろ、古、薄ふたあい」
	同上	江戸時代の染色文献の紅色系統は、蘇芳染による場合が多い。その色を紛紅と言う。 「あかね或はすおう染、又まがい紅ともいふ」	照柿 「照柿。丹土染、古名くちばいろ。此いろに薄藍を兼ねたるを 柑子いろ又萱草色ともいう」	銀煤竹 「銀煤竹、一説に宗左(茶道・千宗佐)所好といふ」	鉄御納戸、常用服に流行。 「染いろと織色のたがひあり 又外にのしめなんどの一種なり」	藍墨茶、根津権現の祭礼の節、浅草で男衆がけんかをし、和解が成立したしるしとしてこの色を染め、双方揃いの着物を着たことによる。	藤色 「ふぢいろ。あみふぢ、紅ぶぢの二種あり、古名うすいろといふ」 藤色と薄色を同色と見ているが、薄色は紫の淡色、藤色に似てはいるが、それより淡く紅味。藤色の本式の染法は藍と紅花。一般には蘇芳と鉄分による代用染。	百塩茶

	同上	朱桜、樺桜 「紅かば一名 紅かうじ 俗 に紅うこんと 云 又和名朱 (かば)さくらと いふ うす紅 の黄ばミたる 也」	枇杷茶 「びわ茶、俗 にかわらけい ろといふ」		殿茶 「当世御めし おなんどの。 うすいろなる を殿茶といひ 出したる事。 殿のひびきよ り御召のうら ぎぬと。案を つけたるまで にて。べつに しさいなし。も つとも。一とう 通用の名には あらず」		菖蒲色 「あやめ あ みがちたるを 桔梗といふ。 赤みがちたる を菖蒲とい ふ」		
	同上	水柿 「水がき、俗に とき浅黄」 (「新古染色 考説附色 譜」)	藍媚茶・璃寛 茶 「藍こび茶一 名りくわん茶」		草柳色・梅幸 茶 「草柳当世通 名梅幸茶」				
	同上		鶯色・檜皮色 「とびいろ。古 名ひわだいろ」		鶺鴒黄 「ひわもえぎ。 古名浅ミどり」				
	同上		洗柿 「あらひ柿、又 薄かうじと云」		濡羽色・青竹 色、 「ぬれは色。 或いは青竹色 ともいふ」				
	同上		利休茶 「利休茶。千 家に見るところ 当代通用の 色目に反す。 いづれが是か 非か」						

1797	『染物秘伝』		伽羅煤竹・奇楠煤竹 「きやら燻竹すかりやす 忒返。うるし忒返。生かね (鉄)忒返。後石灰にて返す」	「りきゆう染」利休白茶の 染色、寛政の初年頃から か。		青袋鼠 「青袋鼠 もみ出し豆汁三返。水ご忒返。但しもみ出シに少し墨を加へ。水色の通り出来上がるをさへ右之返り。又方下藍ニ而染懸上ニ うす鼠豆汁ニテ ヲサエ是もよし。」			
1798									
1799									
1800									
1801					◇花緑青、シュバインフルトで工業生産。(19世紀初め) 画家・塗装家・染色家に歓迎された。有毒であるために使われなくなったが、色名だけは残った。別名シュバインフルト・グリーン、パリス・グリーン、エメラルド・グリーン。				亜鉛華、鉛白に代わって白色顔料に使用(19世紀～)

享和

	文化								
		1802	『東海道中膝栗毛』(～09・滑稽本) 十返舎一九	弁柄色・紅殻色 「べにがらいろのあかきいとのいりたる、たてじまのぬのこ」(2・上)	雀色 「おのづから道急ぐ馬士唄の竹にとまる雀色時、やうやう蒲原の宿にいたる」				
		1803							
		1804		芝翫茶の流行。(大坂の歌舞伎役者の三世中村歌右衛門、文化・文政～天保、江戸・京・大坂)	璃寛茶の流行。(大坂の歌舞伎役者の嵐吉三郎、文化・文政～天保、京・大坂)	岩井茶、半四郎鹿の子、岩井櫛、半四郎小紋、岩井香、岩井煎餅などの流行。(歌舞伎女形・五世岩井半四郎、文化・文政、江戸)	市紅茶の流行。(歌舞伎役者の市川市紅、京・大坂)		
			『我衣』 加藤曳尾庵		煤竹色 「宝暦五年の此より、江戸町々、男女、煤竹色の小袖はやる、羽織も帷子、単物、何れも煤竹なり」				
					白茶、再び流行。利休白茶など。(文化・文政)		鉄色、この頃登場か。鉄御納戸・鉄紺・鉄鼠・鉄深川など、暗い緑色に用いる。		
		1805							
		1806							
		1807							

1808			路考茶、三世瀬川菊之丞の代も流行続く。(江戸・京・大坂)					
1809								
1810								
1811	『染物重宝記』		百塩茶 「ようかん色といふハ、ももしほ茶の事也。」	金煤竹・黄枯茶 「金煤竹といふハ。黄から茶の事」				
1812								
1813	『浮世風呂』 式亭三馬(1809～1813)			黄色 「ちよいと黄色なそそり節は」			紅掛花色登場。	
1814	『傾城筑紫琴夫』 (歌舞伎)		芝翫茶 「正面に障子三枚入てある、上に芝翫茶の暖簾」					
1815	『七番日記』 (1763～1827) 小林一茶		渋茶 「柴の戸や渋茶色なるきりぎりす」					
1816								
1817								

1824									
1825									
1826	『薄様色目』 中村惟徳					淡萌黄(色・襲色目)・黄 「表・淡青, 裏・黄」			
1827									
1828									
1829									
天保									
1830	『嬉遊笑覧』(文政13) 喜多村信節		樺染 「上に樺ぞめの龍門唐子 尽し」			元文の頃、藍海松茶、檳榔子、くり梅、木賊色が流行			
			媚茶、江戸中で流行。(天保)						
1831	『富嶽三十六景』(?) 葛飾北斎					のちの科学的分析の結果、輪郭線には藍を、それ以外の色版(いろはん)はすべて「ペロ」(プルシアンブルー)を用いたことが判明。			
1832									
1833									
1834									
1835									
1836	『春告鳥』(~37・戯作・人情本) 為永春水					御納戸色・媚茶・鼠色 「御納戸と媚茶と鼠色の染分けにせし」			
1837									

家慶

1838	『春色恋白浪』 (戯作・人情本) 為永春水				松葉色・御納戸色 「衣装の袖口は上着下着ともに松葉色の様なる御納戸の繻子を付け仕立も念を入れて申分なく」	紺・媚茶 「帯は古風な本国織に紺博多の独鉦なし媚茶の二本筋を・・・」			鼠色・黄枯茶 「鼠色の御召縮緬に黄柄茶の糸を以て・・・」
1839									
1840									
1841									
1842	『三省録』 志賀理齋		洗柿・本多柿 「本多柿、あらひ柿とも郡山染ともいう中ごろ本多内記郡山に住居申されしとき、多く世上へそめ出すゆえに郡山そめという」						
1843	『貞丈雑記』 伊勢貞丈	梅染・赤梅・黒梅 「梅染 赤梅 黒梅 三品あり、梅やしぶにてざっと染めたるは梅染色。少数を染めたるは赤梅也。度々染て黒みあるは黒梅也。」 (山城梅染・加賀黒梅染が有名)	織色としての檜皮色を、縦糸は緑みの青、横糸は赤で織り上げた物と記載。		陰萌黄・陰萌葱 「かげもえぎと云ふ染色旧記にあり、今とくさ色などと云ふ類なるべし」			唐紅 (平安時代の唐紅の「唐」について)「唐土より渡りしと云物にてはなし。只紅のこき色にて黒みあるほどをさして云也」	

孝明	家定		同上						深紅・真紅 「真紅と云は まことの紅染 と云事也。あ かねなどにて 紅染の似せ 物ある故ほん の紅染を真紅 と云」		
		弘化	1844								
			1845								
			1846								
			1847								
		嘉永	1848								
			1849								
			1850								
			1851								
			1852								
		1853	『染物早指南』			薩摩鼠 「薩摩鼠、か や一遍水か ね酸」	薩摩御納戸 「さつま御納 戸、下ぞめ空 色、かや鉄醬 酢」	深川御納戸 「深川御納 戸、かやの中 へやしやポッ チリ水鉄醬等 分酸」 この頃の御納 戸系の色、藍 は用いず。			
			同上				花萌葱 「花萌葱かや 裏表三遍づつ 濃藍けし」				
			同上				鶺鴒黄 「鶺鴒黄 か やくにつめ て、裏表二へ んづつ あい けし」				

		『守貞漫稿』 (1837~53) 喜田川守貞	芝翫茶・璃寛茶・市紅茶・路考茶・梅幸茶 「又京坂ニテ芝翫茶 璃寛茶 市紅茶 江戸ノ路考茶 梅幸 茶等ハ 文化 文政 天保頃ノ 芝居俳優ノ名ニテ 当時行 レ婦女ノ用タル由ヲ聞ク」				濃紫 「紫 真の濃 紫は黒の如く 也。～(略)～ 古は濃紫一 位の袍色故に 禁色と云て免 許を得ざれば 他人は得着さ る也」 (17)	葡萄色 「古は葡萄色 を喜びいと 訓ず、紫に近 き色也」	
		同上						京紫・江戸紫 「今世は京紫 を賞せず江戸 紫を賞す～ (略)～是今 云江戸紫者 青勝也、京紫 は赤勝にて」 (17)	
安政	1854								
	1855								
	1856						◇英国のウィ リアム・ヘン リー・パーキ ン、世界初の 人造染料。 モーブ(錢葵・ アニリンパー プル)		
	1857	『七偏人』(滑稽 本・1857~63) 梅亭金鷲					糞視 「瓶覗か何か の手拭を真深 に冠って」 (三・下)		
家茂	1858								
	1859								

		万延	1860										
		文久	1861										
			1862										
			1863							葡萄鼠の流行。(文久3年)			
		元治	1864										
		慶応	1865										
	慶喜		1866										
明治			1867										
著作権者：岩崎純一													

天皇	元号	西暦									
			全般	洗朱初出。	小豆色から濃小豆・薄小豆派生。	枯色・枯野、俗に枯草色とも呼ばれる。	若竹・老竹初出。	明治中期より、新来の化学染料が使われるようになり、着物の染色にも鮮やかな青色が使われるようになった。伝統的な花柳界の柳橋に対する新興の新橋を模した新橋色も、その代表。	化学染料による藤色・藤鼠・鳩羽色・鳩羽鼠、婦人向け和服の地色に使用。	秋桜(メキシコ原産)、普及。色名としては、紫味のピンク色。	漆黑初出。乾いても、普通の黒い色料のように白くならず、半永久的な濡れ色の黒を保つ。美しい黒髪・瞳・闇夜などの表現に用いる。朱漆・赤漆とともに、黒漆の漆器も最上の色とされる。
			【明治中期頃より、化学染料の使用】	臙脂色、染色名として初出。	海老茶、女学生の袴に流行。「海老茶式部」	明治中期、橙色登場。一時、英語のorangeに対応する色としての扱い。その後、「橙」の字が教育漢字に採用されなくなり、橙系統の日本語名としてオレンジ色と言うようになった。	若草色・草色初出。葉が葉緑素を増すと、若草色から草色となる。黄緑系統の総称となる。	藍染めの標準色、奈良時代の「縹」、平安時代の「中縹」、江戸時代の「花田」「花色」「藍」「中色」「薄勝色」と変遷、明治に「中藍(ちゅうあい)」と呼称。	紫紺・茄子紺初出。	薔薇色初出。西洋バラに基づく。それまでは「そうび」や「しょうび」と読んだ。薔薇は、英語以外の仏語・独語などでは基本的なピンクの色名。	
				珊瑚色初出。古くから女性の黒髪にかざす簪や和服の帯留めの装飾品などに使用。	枯葉色、Feuille Morteの訳語か。英語には、Autumn Leafと訳された。伝統色の枯色・枯野・朽葉のいずれとも異なる色。	女郎花色、檸檬色と名を変える。	利休鼠、明治以降も流行。『城ヶ島の雨』『利休鼠の雨が降る』北原白秋		紫檀色、Rosewood又はヘイツー(中国)の訳語か。高級家具材に使用。	牡丹色、舶来の化学染料による彩度の高い派手な色となって流行。	

					1889														
					1890														
					1891														
					1892														
					1893														
					1894														
					1895														紫紺鼠の流行。(明治28・29)
					1896	『多情多根』 尾崎紅葉								紺 「お種は紺の深張の日傘をお鈴に渡しながら」					江戸紫 「襟は薄色の金茶に白と江戸紫で」
						『今戸心中』 広津柳浪													藤紫 「藤紫のなまこの半掛」
					1897														紫紺と牡丹色の流行。(明治30～36)
					1898														
					1899	『不如帰』 徳富蘆花								草色 「草色の紐つけし小紋縮緬の被布を着たり」					
					1900	『思出の記』(～01) 徳富蘆花								黄・紅・紫・鳶色 「秋が黄に紅に紫に鳶色にあらふる彩色の限りを尽くした落葉木の」					

						1901	『みだれ髪』 与謝野晶子	臙脂色 「臙脂色は誰 にかたらむ血 のゆらぎ 春 のおもひのさ かりの命」								
							『落梅集・七曜の すさび』 島崎藤村							鳩羽色 「鹿の子模様 の鳩羽色なる を来たり」		
							『思出の記』 徳富蘆花									鼠色 「不図空を仰 いで見ると、 鼠色の綿雲満 天に渦まき」
						1902	『社会百面相』 内田魯庵								石竹色 「丸形の石竹 色のホールラ ンプの下に睦 まじく食後の 茶を喫んでみ た」	
						1903	『別天地』 国木田独歩								蝦茶色 「蝦茶色の仏 蘭西織のカー テン」(上3)	
							『魔風恋風』 小杉天外								海老茶色 「デートン色 の自転車に海 老茶色の袴、髪 は結流(ゆひ なが)にして、 白いリボン清 く」	

								鶯茶 「池には漣、 庭には黄菊白 菊、その間を 悪魔の手と なったかの令 嬢は、夜会に 束ねた髪に鶯 茶のリボンを して」							
					1904	日露戦争				勝軍色、軍勝 色流行。武将 にとって縁起 の良い勝色に 由来。					
					1905	『青春』(~06) 小栗風葉	白小豆 「白の匹田入 の薄小豆の帯 揚げを結び直 す」	牡丹色 「トルコ模様を 織出した牡丹 色の帯」	白緑 「ルネッサンス 式の厳めしい 煉瓦門は、白 緑色に塗られ た鉄格子の扉 と、鉄鋸の一 面に鎧はれた 櫓の扉とで二 重にハタと閉 ざされて」						
					1906	『葬列』 石川啄木	曙色・浅緑 「十八歳で姿 の好い女、曙 色か浅緑の簡 単な洋服を着 て」								

								琥珀色 「朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、2・3滴づつ茶碗のそこへしたたらす」	淡黄 「木蓮の色は～(略)～極度の白きをわざと避けて、あたたかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下して居る」						
															紅色 「此手拭が湯に染まった上へ、赤い縞が流れ出したので一寸見ると紅色に見える」
															藤色 「頸のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染めの襷(たすき)や、それらが悉く優美に眼にとまった」
					1907			小豆色 「違棚の高岡塗は沈んだ小豆色に古木の幹を青く盛り上げて」							鴉色 「鴉色に銀の雨を刺す針差を裏に」
								小豆色 「羽織は薄い小豆色の縮緬に」							董色 「董色の手巾で口許を蔽うて笑ったが」

						『宮沢賢治歌稿』				青竹色 「ホーゲーと 焼かれたるま ま岩山は青竹 いろの夏とな りけり」			
						『邪宗門』 北原白秋				若草色 「若草色の夕 あかり濡れに ぞ濡るる」			
						『廃園』 三木露風					紫紺 「わが頭上に 懸る紫紺の 空」(夜)		
						『永日小品・行 列』 夏目漱石							消炭色 「胴中にただ 一葉、消炭色 の中に取り残 された緑が見 える」
						『田舎教師』 田山花袋							灰色 「硝子戸は埃 に塗れて灰色 に汚くよごと て」
					1910	『土』 長塚節		橙色 「強烈な光が 横に東の森の 喬木を錆びた 橙色に染め て」					

					1911	『少年』 谷崎潤一郎	退紅緋色 「そのうしろに 西洋館の退紅 緋色の煉瓦が ちらちらと見え て、いかにも 物持の住むら しい、おくゆか しい構えで あった」						銀鼠 「こんもりした 邸内の植ゑこ みの青葉の隙 から破風型の 日本館の瓦が 銀鼠色に輝 き」
						『妄想』 森鷗外		橙黄色 「丁度わたり 一尺位に見え る橙黄色の日 輪が、真向う の水と空と接 した処から出 た」					
						『思ひ出』 北原白秋		樺色 「カステラの縁 の渋さよな、 褐色(カパイ ロ)の渋さよ な、粉のこぼ れが眼につい て、ほろほると 泣かるる」		紺色・牡丹色 「紺色の可憐 な燕の雛が懐 かしさうに、牡 丹いろの頬を ちらりと巢の 外に見せて」 (わが生ひた ち)			
著作権者： 岩崎純一													

天皇	元号	西暦											
				全般	臙脂色、大正末期から昭和初期に流行。					新橋色流行。新橋の芸者達の置屋は今も銀座に名前の残る金春新道にあったため、金春色とも呼んだ。	竹久夢二、女性の着物に藤色多用。	長春色、訪問着の色として愛用される。	
大正		1912	『灰燼』 森鷗外							薄藍 「着てゐる半纏も腹掛も紺の色が悉く褪めて陸軍の囚徒の着る着物のやうに薄藍色になつて」			灰色 「灰色でない日には、幾分の快樂があつたと云つても好い」
		1913								◇天然インディゴ、ほぼ合成インディゴにとって代わられる。			
			『桐の花 秋思 五章・百舌の高音』 北原白秋							紺 「百舌啼けば紺の腹掛新しきわかき大工も涙流しぬ」			
		1914	第一次世界大戦										二酸化チタン、白を代表する白色顔料として普及。

					1919	『蜜柑』 芥川龍之介		蜜柑 「暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私は思はず息を呑んだ。(略)暮色を帯びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに声を挙げた三人の子供たちと、さうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と一すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。」 色名としての蜜柑色は、さらに後か。						
						『或る女』 有島武郎								乳白 「天才が持つと称せられるあの青色をさへ帯びた乳白色の皮膚」
					1920			帝国陸軍、被服用茶褐布の色相を帯赤茶褐から帯青茶褐に変更。						
						『焚火』 志賀直哉				青磁色 「段々白い雲の薄れて行く、そして青磁色の空の拡がるのを眺めて居ると」				

						『畑の祭「海光・雨中光景」』							古代紫 「雨はふる、ふる雨の霞がくれにひとすぢの煙立つ、誰が生活(たつき)ぞ、銀鼠にからみゆく古代紫」	
					1921	『あらたま・暗緑林』 斎藤茂吉				暗緑色 「さやぎつつ鴉(からす)のむれのかくろへる暗緑の森をわれは見て立つ」				
						『蓑虫と蜘蛛』 寺田寅彦							紫黒色 「取り出した虫は～(略)～紫黒色の肌がはち切れさうに肥って居て」	
					1922									
					1923	『青銅の基督』 長与善郎				紺青 「隈なく晴れ上がった紺青の冬の空の下に」				

天皇		元号		西暦								
						全般	合成色素アリ ザニン(茜)			鬱金、利胆薬 や芳香性健胃 薬、カレー粉 や沢庵漬など の食品添加物 に使用。		海老色・海老 茶の字が用い られる。
昭和				1926								
				1927	『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治						桔梗色 「美しい美しい 桔梗いろのが らんとした空 の下を」	
				1928								
				1929								
				1930	『いきの構造』 九鬼周造		燻茶					
				1931	『色名總鑑』 和田三造							
				1932								
				1933								
				1934			陸軍省、陸軍 軍服の色を 「国防色」と命 名、被服統一 運動を開始。 古くは紺色の 上着を使用。					
					『山羊の歌』 中原中也					縹色・花田色 「小鳥らの う たはきこえず 空は今日 は なだ色らし、倦 んじてし 人の ころを 諫め する なにも のものなし」		

					2008			琥珀、美しい色のウイスキーなどの形容。	鬱金、利胆薬や芳香性健胃薬、カレー粉や沢庵漬などの食品添加物として使用。	マラカイト・グリーン(青竹)	合成インディゴ(藍色)	紫紺、荘重さから優勝旗の色に使用。	ピンク、本来ナデシコ科の植物の総称。撫子・石竹・カーネーションなどの花の色を言う。今日では明るく薄い赤色系統の総称の基本的色名として用いられる。	二酸化チタン、化粧品・食品添加物に使用。
								小麦色、日焼けした健康な肌の色を形容。翻訳語か。	鶯茶・鶯萌黄、和装に使用続く。			紫色は平安時代にも好まれたが、現代の紫色の流行は明治以降の化学染料による藤色や董色の流行を経過したことによるもの。藤紫系統の色も、現代では単に紫と言う。	石墨(黒鉛)、主に筆記用として鉛筆の芯に使用。	
								橙色、ほとんどオレンジ色に取って代わられる。						井鼠、日本人の背広の色に象徴的に使用される。
								肌色、奈良時代の宍色や江戸時代の肉色に比べて理想化された明るい色となった。						
著作権者： 岩崎純一														